
じゅぶないる作文クラブ

上葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じゅぶないる作文クラブ

【Nコード】

N9220V

【作者名】

上葵

【あらすじ】

目標もなく自堕落な日々を送る少年の趣味は暇潰しに小説を綴ること。彼の小説を秘密裏に手に入れた稲葉冥利はいっしょに小説を書こうと提案を行う。

夏がくる前に（前書き）

いまいちジャンルがわからない作品ですが、どうぞお願い事致します。

夏がくる前に

梅雨明けを迎えた天気は目が眩むくらい輝いていて、開け放たれた窓から夏の気配がゆったりと流れこんできていた。ほんの小一時間前、喧騒に支配されていた教室は、夕刻をむかえ不気味なほど静まりかえっている。

「ドッキリならさつさと言えよ」

理路整然と並ぶ机、上履きの黒ずみが残る通路、それらを挟んで制服姿の二人の男女が向かい合って立っていた。

先制攻撃のようにトゲのある語調で口を開いた少年、結城裕也は自他ともに認める平凡な人間だ。これといった特技はないし、スポーツに恵まれた体格や何か秀でた才能も、授かることができなかった。趣味は読書や映画鑑賞とありがちで、成績や学校生活等、すべてに置いて並な評価を受けてきた。卒業後は誰の記憶にも留まることなく在籍記録はただのデータになりはてるだろう。

生きてきた14年で最も目立ったエピソードは、小六の修学旅行を風邪をこじらせ欠席し、卒アルに別窓が添えられた事くらいだ。

そんな箸にも棒にもかからない人生を歩んできた彼の下駄箱に通のメモが置いてあった。女子特有の可愛い丸文字で『放課後教室に残ってください』。

モテるようなタイプではないし、顔立ちもこれといって誇れるものではない、人生に三度訪れるというモテ期は胎児の頃に終わっているわけで、このメモがラブレターでないことくらいとうに見破っている。

分析を数秒で終わらせた凡庸な一中学生にすぎない彼は、なんかやかやで教室に居残るという選択肢をとっていた。

「ドッキリ？」

首を傾げたクラスメート、稲葉冥利は優等生だ。丸みを帯びた柔らかな頬、目鼻口一つ一つのパーツが均整に配置されていて、端正

な顔立ちは人を引きつける魅力に溢れていた。その一方で特定の人と長く絡むことはなく、宙ぶらりんな存在として二年一組の生徒から認識されていた。

「下駄箱のメモ、稲葉が入れたんだろ」

「うん。来てくれて良かった」

「だったら早く言えよ。俺だって暇じゃないんだ」

「用事あるの？」

「いや、なんにもないけど……」

放課後の教室には稲葉冥利と二人きりというイベントが配置されていた。青臭い青春劇が始まるような鼻の頭が痒くなるシチュエーションだ。

しかしながら懷疑主義者を自負する結城には、彼女の後ろの掃除用具入れが開いて馬鹿な友人が飛び出してくる可能性を捨てきれずにいた。

稲葉冥利の捉えどころのない雰囲気はミステリアスと称され、実際男子からの人気も相当数ある。隠れファンを多く獲得している少女が、俺みたいな日陰者に裏心なしに声をかけるとは考えづらい。

「やっぱり人前でこういう話するのは気が引けて」

看板持ってドッキリでしたー、という気配はないが、結城は未だに猜疑心を拭えずにいた。

「1ついいか？」

煮え切らない態度に、とぼけてみるのもパターンとしてはアリだが、鈍感を気取らずストレートに終わらせて、イタズラだった時の心のダメージを少なくしようと彼の唇は迅速に動いた。

「告白だよな？」

「こくはく？なんの？」

「いや、だから、愛の……」

「え？」

「ち、違うのか？」

「あ、そっか、あの書き方じゃそんな風にもとれるのか。えっと、

わざわざ残ってもらったのは告白する為ではなく」

「じゃあな。窓閉めとけよ」

傷ついた心を隠そうと一歩さげた右足を軸に、綺麗な回れ右する。体育教師がこの場にいたら、教育の賜物だと泣いて喜んだだろう。

「ちよ、ちよっと待って」

立ち去ろうとする彼の背中に、稲葉は声をかけた。

「話は終わっていない」

「付き合ってほしい、ってわけじゃないんだろ」

「うん」

「……」

蝉時雨にはまだ早い向暑の夕暮れ。気のせいとはわかってはいるが耳にヒグラシの切ないメロディーが響く。

虚しく肩を落とす結城に、稲葉は微かに口角をあげ一冊の薄橙色のノートを差し出した。

「これ」

「あ」

見覚えのあるかすれた表紙。視界に収めた途端、顔に熱がのぼる。彼にとって、それはある種の爆弾だった。

「な、なんで……？」

「前々から気になっていた。反応を見るにビンゴみたい」

「まじかよ」

A4サイズで罫線が入ったオーソドックスな学習用ノート。名前欄は空白になっているが、今週のはじめ無くした結城裕也の所有物に間違いない。

「ああ、俺のだ」

耳まで赤くし、彼女の手からノートをひったくる。

中には自作の小説が長々綴られていた。

連続殺人鬼アイスピック男に孤独な戦いを挑む少年の話だ。構想プロットオール無し、ただ思いつくままにシャープペンシルを動かした、作品と呼ぶに呼べない代物、授業中の手慰みだ。

視線を合わせぬようパラパラと捲りながら、結城は精一杯平静を装った。

「ひよっとして読んだか？」

「うん。面白かった。ただあのラストはないと思う」

「うるせえ、めんどくさくなったんだよ」

「そこが少し残念だったけど、差し引きしても余りあるプラス、とても楽しめた」

「てらうことのない真っ直ぐな評価に言葉を失い、彼は唇を引き結んだ。

あまりの恥ずかしさに脳内で悶える彼の裾がちゃんと引っ張られる。無意識のうちに帰宅しようとしていたらしい。

「もう少しだけ話を聞いて」

「……ノートサンキューまた明日、これでいいだろ？」

「私は落とし物を届けるためだけに、あなたに残ってもらったわけじゃない」

同じクラスになって2ヶ月ほど経つが、元の面識なんてあつてないようなものだ。互いに顔見知り程度の仲で、それ以上も以下もない。

「1つ頼みがある」

彼女は少しだけ強張った声で続けた。どうやら緊張しているらしい。

「今から私と一緒に小説を」

「嫌だぞ。絶対に嫌だ」

「まだ最後まで言ってない」

「俺のノートからの話題なんてロクなもんじゃない。そうだろ？」

「二人でアイデアを出し合って小説コンクールに応募しよう」

「ほらろくでもない」

嘆息ぎみに結城は呟き出口に向かって歩きだした。

「あのノートを読んで確信した、結城には文才がある」

かん高い声でこっ恥ずかしい誉め言葉を高々と言い放つ。人氣が

ないのがせめてもの救いだ。

「私にはないアイデア、構成、キャラクター、どれをとっても引き込まれるものだった」

「お為ごかしはよせ。ヨイショしたところで協力はしないからな。かつたるい」

「違う、埋めるには勿体無い才能だと思った。読んでもらいたいからあの小説を書いたんでしょ？」

「ただの暇つぶし。そもそも下手に他人に手垢つけられるより、最初から自分だけで頑張ったほうが完成の喜びも一入だろうぜ」

結城は彼女を無視し、ドアに手をかける。これ以上話をしていても埒があかないと判断したのだ。

ドアを開ける前に、無言になっていた稲葉冥利は静かだが語気のある声を上げた。

「世の中に発信者と受信者という二種類の人間がいる。私は生っ粋の読者だから、一人では書き手にはなれない」

「どういう意味だ」

「読めば読むほど、自分に心がないと浮き彫りにされた。私には文才がない」

「頑張れ。努力でカバーしろ」

冷たく言い放たれたが、彼女はたじろぐことなくピシッと背筋を伸ばし、選手宣誓のような朗らかさを持って彼の瞳を真っ直ぐ見つめた。

「あなたの文章は私の心に確かな感慨を芽生えさせた。結城裕也には筆力がある。発展途上だけど人が書けない文章とアイデアを持っている、協力をお願いしたい」

誉められて悪い気になる人はいない、とはいえ慎重に対応しなくてはならない事柄だと揺らぐ心を冷静に見つめ返す。

「断る。お前の気の迷いに付き合ってやるほど、俺の度量は深くないんだ」

「さすがに一筋縄ではいかないか」

思い通りに事が運ばなかったから不機嫌になった、というわけはなさそうだ。小さく息を吐いて稲葉冥利は独り言を言うようにぼそりと呟いた。

「予定では喜び勇んで賛成してくれるはずだったのに」

率直な意見を鼻でせせら笑う。

「ありえん。そんな軽く見られてるなんて心外だな」

「やった、女の子と会話するなんて一年ぶりだ！はい協力します！みたいな」

いままでの会話で一番明るい声をだされ、一瞬身動き出来なくなつたが、それが人を小バカにした演技だと気付いて微かにトサカに來るものを感じた。

「お前は俺をなんだと思ってるんだ？人を敬う気持ちを感じられん」

「あなたは人間味が少しだけ薄い。真心が足りない」

「どっちがだ」

呆れを吐き捨てるように、再び教室のドアに手をかける。

くすんだ白い扉を開け、オレンジ色の日差しが差し込む廊下に歩みを進める。「待つて、もう少しだけ」

敷居を跨ぐと足をあげたところで呼び止められ、嫌々ながら無視するわけにもいかず、鼻で息を吐きながら足をゆっくり下ろす。

「どれだけ頼まれようと返事はノーだ。人のノート勝手に見といて押し付けがましいと思わねーのか」

「仮にも落とし物届けて上げたのに」

「感謝してはいるが恩着せがましいとは思わねーのか」

「文脈がちよつと変わっただけじゃない」

蝉はまだ土の中で気合いを溜めていて、辺りは静けさに支配されている。静寂を切り裂く少女の華やかな声、乗り気はしないがしつこい一蹴するには忍びなかった。廊下を背に振り向く。

「んじゃあと一分だけ話きてやるから、それで諦めろ」

言い分に耳を傾けるだけで、賛同する気は微塵もなかった。

「ありがと。結城、私といっしょに小説を書こう」

「だから嫌だつて言つてんだろ！人の話きけ！せめて言い方を変え
るとか工夫しろよ！」

怒鳴られたのに気にする風もなく、「んー」と上目づかいでなに
やら考えていた彼女はやがて握り拳を手のひらをぼんと受け止める
古典的アクションをとってから口を開いた。

「一つ提案がある」

「ほう」

楽しそうな声をあげ人差し指をピンとたてて結城の眼前に近づけ
た。

「ゲームをしよう」

一瞬の沈黙に微かな色があることに気がついた。プラスバンド部
の演奏が遠くサンクガーデンから確かな音を風に乗せて二年生の教
室まで届かせている。 テッテレー。それはさながらドラえもんが
秘密道具を出した時の音に似ていた。「ゲーム？なんのゲームだ？」
かくれんぼ、鬼ごっこ、缶けり、ドロケイ、身体を使った懐かし
の遊びから最新のテレビゲームまで、脳内をぐるぐ
ると単語が巡る。

「負けたら勝者の言うことをなんでもきく」

「よしやろっ」

即断即決だった。

「……さっきまでの断固とした拒絶の態度は？」

「グダグダうるせえな。ルールは？」

曲がりなりにも相手は美少女と名高い稲葉冥利。クールな態度を
取りながらも思春期少年にはいささか刺激が強すぎて、自制心に悶
々とした感情が一瞬だけが勝ってしまったのだった。

「ルールは古今東西ゲーム。テーマに沿った回答をリズムに合わせ
て交互に言い合っていく」

「ふうん。お題は」

勝った時、どんな命令をしようか。口調は冷静だが脳内は不純物
に溢れていた。いかかわしい妄想は男子中学生の常である。

「うん。……よし」

また手のひらを叩き合わせてから続けた。

「虹の色にしよう」

「……」

彼はあくまで冷静だった。

「それじゃ私から。赤」

「おいちよつと待て」

タイムにたじろぐ。

「な、なに？リズミカルにやらないと失格だと言って」

「七色じゃ全部言ったって絶対先行が勝つじゃないか」

「ち、小さい事にこだわるね」

「人を舐めくさるのも大概にしろよ。やってられるか」

稲葉は結城を勝ち目のないゲームに乗せ、小説を書かせたらしい。それを看破した彼が彼女の口八丁に付き合うの危険極まりないだろう。

「文化や時代によって虹の色は数は変わり、沖縄では二色だし、七色と決め込むのは紋切り型というか」

なにやらグダグダ言っている彼女を無視して、十字架のような窓枠の影が落ちた廊下に歩みを進める。

「待って、ラス1」

ここまで来るとさすがに疲れてくる。

「しつこいな。気まぐれタイムは終了したの。ちょうど一分位だしな」

彼の後に続いて稲葉も廊下に飛び出た。

「春の七草で勝負」

結城は無言で振り向いて、三白眼がちの目つきを輪をかけて悪くした。

「うつ、あ、秋の七草」

「黙れ」

「ギニュー特撰隊！」

「帰れ！」

彼の一喝を涼しい顔で受け止めた稲葉は徐々に小さくなって行く彼の背中に声をかけた。

「今日1日考えて明日また返事をちょうだい、それでダメなら諦める」

全く災難だ。

結城は小さくため息をついた。美人につきまとわれるのは嬉しいが、相手がぶっ飛んでるとなると話は違う。

窓の外には夏に向かって赤色の飛行機雲が真っ直ぐに伸びていた。

駐輪場にて

稲葉と別れ駐輪場にやってきた結城は、小学生の頃から乗り回している愛車のチェーンを外そうとしゃがみこんだ。

6段変形のギアシフトは5に固定されていて、ブレーキをかけるたび悲鳴を上げるようになっていいる。やりもしないメンテナンスについて考えながらチェーンに鍵を差し込んだところで後ろから声をかけられた。

「やつほー。イカす自転車乗ってんねー」

しゃがみこんだまま振り向くとショートボブを金色に染めた派手な女生徒が立っていた。制服は注意されない程度に改造されていて、至る所に可愛いアクセサリーが留めてある。見た目はギャルだが、不思議とケバケバしさは感じなかった。逆光となって表情は窺いしれなかったが、茶色に浸食された自転車を誉めるなんて冷やかし以外にありえないだろう。

「ドンキで二万円だった」

「ありやそう。ふふーん。安くていい仕事してるなー。君もそう思うでしょ？」

「あんた誰だよ」

帰宅部なら遅すぎるし部活なら早すぎる中途半端な時間帯。帰宅ラッシュは終わり、彼の自転車の周りには一台も停められていない。「あたしは二年四組の日向葵。気軽にヒマワリってよんでね」

「ヒナタ？日が向かうって書いて日向だったら、ヒマワリにならないじゃん」

ヒマワリは漢字で向日葵だ。ヒナタアオイでは、ヒマワリとは読まない。

「細かいことは気にしないー。そう言う君は？」

「……結城裕也」

一瞬名乗るのをためらったが、素直に本名を明かすことにした。

「ユウキユウヤか。うーん明日までにあだ名を考えるからちよつとまっけてね」

「ごめん被る、と素直な気持ちを吐露する代わりに彼は左手に留められた腕時計を彼女に見えるように指し示した。

「時刻は17時を回ったところです」

「派手な容姿をしたタイプが苦手なのだ。できることなら会話を打ちきり、早々に帰宅を開始したい。

「別に時間を訊きたいわけじゃないんだけど……、すこーしだけ話を聞いてくれるだけでいいんだよね」

「稲葉とのいざこざで虫の居所が悪い結城にとって、面識もない赤の他人からのその言い回しは鼻についた。

「この日向という人物、自分の自転車があるから駐輪場にいるというわけではなさそうだ。わざわざ他クラスの生徒を呼び止めなければならぬ理由なんてあるのだろうか。

「もしかして告白か？」

「そんなわけないじゃん。初対面だよあたしたち」

「……まあ、そうだろうな」

「わかっていたこととはいえ、ヒグラシの切ないメロディーが彼のエウスタキオ管を超高速で通過した、気がする。

「んじやなんだよ。要点だけ掻い摘んでさっさと見えよ」

「そうだねーそのほうが手っ取り早くすむしね」

「明るい調子で彼女は続けた。

「イナバミヨウリとは付き合わない方がいい」

「は？」

「その固有名詞が先ほど教室で二人きりだった『稲葉冥利』を指していることに気づいたのは数秒が経過してからだった。

「い、一組の稲葉冥利か？」

「いえーす。そんな変わった名前、あの子くらいしかないしね」

「なんで四組のあんたがあいつの事を気にかけるんだ？」

「んー、説明すると複雑だから、秘密ってことにしといて」

意見追隨を許さないストレートな黙秘権の行使、知り合いでもない他クラスの男子生徒に忠告を行うプロセスを無粋な好奇心から推理してみるが、これといった動機は思い浮かばなかった。

1つだけいえることはこいつは放課後残るよう稲葉にお願いされたことを知っているのだろう。でなければ、ここで俺を呼び止める理由がわからない。

「勘違いしてないか？さっき教室で稲葉とした話は告白なんかじゃないからな」

「カップルとして付き合う以前に稲葉冥利とは関わり合いを持たないほうがいいよ、って言ってるのさ」

「ますます意味がわからん。稲葉の勝手だろうが、お前があいつの人間関係制約する理由なんて、……ま、まさかお前っ」

独自の回答に行き着き荒れた彼の言葉尻に、一瞬だけ日向葵の表情はこわばった。

「稲葉冥利が好きなのか！？」

「ふえ？」

「いやまてみなまで言うな。全部理解した。そうかそうなのか、これが噂に聞く百合というやつなのだな。まああれだ、世間の風当たりが強かろうと愛があれば大丈夫なはず」

「ちょ、ちょっとまってよ、それはないって」

「フレディーマーキュリーだってカート・コバーンだって、な。社会で認められるやつは大抵そうなのさ」

「ちがーう！」

存外大きな声を出して、頬を仄かに紅潮させた日向は結城の勘違いを否定した。

「私はただ単に忠告をしたいだけだって！」

結城は暴走に水をさされ妙に落ち着きを取り戻していた。淡々とチェーンを外し、発車できる位置まで自転車をバックさせるとサド

ルにまたがる。

「そんな忠告を俺にする理由はなんだ？」

ペダルに片足をかけ橙色の光をキラキラと反射させる日向の金髪を見下す。

「だからそれは秘密。とーもーかーく、稲葉冥利とこの先付き合っ
て行くならよく考えた方がいいからね。安易な気持ちで捨て猫に
餌あげちゃダメなのとおんなじ」

「際ですか。言われるまでもねえ」

いまだかつてない絡まれかたに辟易とし、別れの言葉を紡ぐこと
なく、車輪を勢いよく回転させた。

風に全身が包まれると同時に「じゃあねえー」と小気味よい挨拶
が背中に届く。無視するのも気が引けたので小さく片手をあげ、黄
昏時を駆け抜けた。

自宅に着いてから時間の矢は加速を始める。判を押したように
同じ日々の繰り返し、今日のようなハプニングが連発する分、学校
生活のほうで退屈を紛らわせるには適していた。

帰宅と同時に母親から風呂にはいるように言われ、上げれば夕食
の時間。食事を終えた19時から就寝前の23時まで、中学二年生
のフリータイムがスタートする。

とはいえ、やりあきたゲームソフトを起動する気にもなれず、結
城裕也はベッドに仰向けに寝っ転がった。

金太郎飴のような時間の概念。退屈紛れに勉強しようにも、なに
から手をつけていいのかわからなくて、ただ漫然とした焦燥感だけ
がふつつと沸き立っているだけだった。

カバンから薄手の文庫本を取り出し、生あくびを噛み殺しながら
ページを開く。近所の古本屋で買った、一般書店では流通していな
い絶版本ではあるが、持て余した時間を潰すのには有効な手段であ
った。

古本の独特匂いが鼻につき、ふと時刻稲葉冥利と交わした会話の

一節が蘇る。

『世の中には発信者と受信者の二種類の人間がいる』

読者たる彼女は後者だという。

俺も同じだ。

ノートに綴った小説に意味はなく、それこそ黒歴史ノートを生産したに過ぎない。アイスピック男なんて出落ちもいいところだ。中学生特有の異常犯罪に対する純粋な興味から、映画のビザール殺人者を自分なりにアレンジを加え綴っただけだ。

誰にも読まれることなく、自身の記憶の淵に沈殿していく妄想。それを彼女が掬いあげた。

初めての自分以外の読者、本音を言うなら少し嬉しかった。

それでもやっぱり俺は書き手になんてなれない。よくて紛いものだ。

本物の文章が綴られた軽い重みの存在感に、彼の創作意欲は飲まれてしまった。

ゴロゴロと楽な姿勢で活字を目で追っていたら眠ってしまったらしい。

背中を請け負っているはずのしわくちゃシートは空気に変化し、ご丁寧にも身体は制服が持つ軽い重みに包まれていた。一瞬にして教室の真ん中に移動しているという違和感に襲われる。

「夢か」

自分が夢の中にいることに気がつくのは初めての経験だった。

意識を保ちながらみている夢を明晰夢という。脳が半覚醒状態のために起こると考えられ、自覚した時点で目覚めなければ、内容を自分でコントロールできると都市伝説的に語られている。

しかしながら、有るのは見慣れた現実的な光景であり、コントロールできたところでやれることはたかが知れていた。

景色はゴーグルなしで見た水中のように澱んでいて、廊下側の後ろの席に、誰かいるのがなんとなくわかった。

「誰だ？」

返事はない、この人物は言葉に耳を傾ける余裕がないと感覚的に理解した。言い表せられないモヤモヤが胸ぐらにつかみかかる。

そっちに行くな！神経の忠告を無視し消え入りそうなうめき声とする霞がかつた廊下側の席に進もうとした時だ。

「あちゃー、まっさかー」

背後から明瞭とした聞き覚えのある少女の声がした。

振り向いて確認するまでもなくそこにいる人物が誰か結城はわかっていた。

「まさかヒマワリが夢にあらわれるなんてな」

素直な感想を告げると夢の中のオブジェクトであるはずの日向葵は眉間の皺をのばしてから、ニツと歯を見せて笑った。

「まあそういうこともあるさ」

金色に染められた短い髪をなでつけてから、椅子に腰をおろす。

「ユーユーも因果な性分だねえ」

半ば呆れるような独り言。首をひねる彼を、イタズラめいた表情でピストルの形で指差した。

「自我持ちでしょ？」

「意識はしっかりしてるけど……、つうかユーユーってなんだ？」

「結城裕也だからユーユー。んー我ながらハイセンスー」

少しもそうは思えなかったが突っ込みを入れても仕方がない。結城は決心を固めるように鼻息を荒くして、

「まあいいや、お前がなにを言いたいのかしらんが、面倒くさいから俺は寝る」

「まさに現在進行系で睡眠中だよー」

「夢をみるってことは浅い眠りってことだろ。だからさっさと深い眠りについて下らない浮き世のことを忘れたいんだ」

悲しい明晰夢のコントロールだった。

「んー、ちよつと認識が間違ってるかなー」

彼女は教壇に立ち、教師さながら黒板に文字を書き付けた。

チヨークがすり減るたびに妙にリアルな音が耳に響く。

「まず眠りには二種類あることをご存知かな？」

山や谷の循環が描かれた正弦波線がひかれ、

「さつきユーユーが言った浅い眠りってのがレム睡眠ね」

1つの山の頂点にレム睡眠と綴られている。

「レムは急速眼球運動、眼ん玉がぐりぐり動いてるよーっ意味。この浅い眠りの時に夢をみると考えられてきたけど近年じゃ違うみたい」

谷にはノンレム睡眠と文字を書いて彼女は振り向いた。

「深い眠りであるノンレムの時も人は夢を見てるんだってさ。人間はこのレムとノンレムを繰り返して寝てるってわけ」

左端に入眠時、右端には覚醒と書いてから、

「まずノンレム、そのあと1時間から2時間ほどでレム睡眠。交互にこれを繰り返してる。大体レムは90分ごとに30分ほどあらわれ、またノンレムに移行していくってわけ」

ねっから文系で人体の不思議に微塵も興味がない結城にはちんぷんかんぷんな話題に他ならなかった。

「ただレム睡眠時のすつきり爽やかな目覚めの時、夢を見たと思えてる場合が多いんだよ」

「いやなんつうものすごくどうでもいい。なんで夢の中まで授業を受けなくちゃいけないんだよ」

口をついたのは率直な感想だった。いちいち理論を突き詰めていては、きりが無い。深夜に呼吸のしかたや舌の位置が気にしては安穩な睡眠は迎えられないだろう。

「覚えおいて損はないよー。特にこれから稲葉冥利と付き合っていくからね」

「冥利？なんでまた？ほんとお前あいつにこだわるな。一体なんだってんだ」

「それはねえー」

にやりと歯を見せた日向が教壇から降りて、手についたチヨーク

をパンパンとはたたきながら結城の目の前まで歩みよってくる。

「誰です？」

彼女が続きを口にする前に、別方向から声がした。振り返ってみてみると、ポニーテールの小柄な女の子が結城を遠くのものを観察するように目を細めて立っていた。

首を傾げながら、自らの夢にも関わらず見覚えがない、掃除用具入れにもたれかかる彼女に話かける。

「お前こそ誰だ」

「私が質問してるんです。誰ですかあなた」

「知らないやつが俺の夢にでてくんな、帰れ」

「このバカは誰ですか、日向」

音もなく突然あらわれたちんちくりんな少女は結城を無視して日向の方を向いた。

「ユーユーだよ。一組の」

「現実の人間？それってイレギュラーじゃないですか。落ち着きすぎですよ。対策を講じなければ」

「慌てたって仕方ないよ。来ちゃったんだから」

「それは、そうですが。本当に自由人ですね。やれやれです」

仲よさげに話し合う夢の住人AとBに苛立ちを感じながら結城は怒鳴り声をあげた。

「もういいから消えろ。休ませてくれ」

二人はきょとんと彼に視線をやる。

「なんなんだお前ら。俺にそんな想像力ないはずだぞ」

「それは私のセリフでもあります。少し静かにしてください」

「わけわからん……」

見覚えのない黒髪の少女。

会ったこともない彼女は、自身も通う羽路中学の制服に身を包んでいた。ふと気になって自分の服装を見てみる。水色のシャツ、赤いネクタイ、ダークグレーのズボン。着慣れた制服だ。

周りを見渡してみれば、さきほどよりはつきりと景色が見れた。文字が書かれた黒板、等間隔に並ぶ机と椅子、黒ずんだ床。馴染みが出てきた二年一組の教室で違いない。

その教室の後ろの席にこれまた別の少女が机に伏せていた。また新たな登場人物か、夢の中ならハーレムだなと惨めになりながら、話かけようと歩きだした彼に日向が頭を掻きながら声をかけた。

「それにしてもユーユー、なんで出てきちゃたんだい？」

首だけを彼女に向け「知るか」とぶつきらぼうに応える。それを意に閑さず日向は現れたドアを指差して言った。

「たぶんそこから出れば夢は終わるよ」

「いつの間にドアがあらわれた？」

「今日はこれくらいで。詳しいことは明日また話すよ」

「結構けだらけ猫はいだらけ」

冷たく言い放ち、言われた通りドアを開ける。

その刹那、彼は思いだす。あの幼い少女が伏せていた場所が、稲葉冥利の席で、はじめのすすり泣きはその辺りから聞こえた事を。

意識は、一瞬眩いばかりの白い光に包まれ、それからすぐ睡眠という真つ暗闇にぼつぼつとゆっくり沈んで消えた。

実情と

目覚まし時計が耳障りなアラームで起床を促す。

カーテンの隙間からは穏やかな朝日が差し込み、室内は澄んだ空気に満たされていた。

眠気に支配された瞼をむりやりこじあけ、視界に訪れたのは見慣れた天井。

「朝か」

確認をとらなければ、世界が希薄なものに感じてしまうほど今朝の夢は生々しかった。グロテスクな表現やショッキングな出来事はなく、ただ教室に佇んでいるだけだったが、妙に現実的で、内容もはつきりと思いだせる。

「夢だー！」

とりあえず叫んで上体をはねあげた。

市立羽路中学校は在籍生徒数1300名と至って平凡な中学校である。大半が学区だからという理由でこの中学を選択したのだろう。校風こそ『責任を伴った自由』だが、結城裕也は閉塞感に似た苦しみを感じていた。結城のような『普通の生徒』は高すぎる自由度に足踏みしてしまい、なにもできないでいる。

眠気と戦いながらペダルをこぎ、初夏の爽やかな風と共に朝日を浴びて黄金色に輝く校門をくぐる。

そのままの足で二年一組の教室まで行き、日常のスタートラインに立とうとした結城は自分の席に我が物顔で鎮座している少女を見て頭を抱えた。

お喋りに花を咲かせているというわけではなく、口を結んで分厚いハードカバーに視線を落としている。

何事かと遠巻きで様子を伺うクラスメートたちの視線を無視し、自らの存在をアピールするようカバンを乱暴に机の上に置いた。

「そこは俺の席だ」

「おはよう結城。素晴らしい朝だね」

「挨拶は後だ。どけ。お前の席は向こうだろ」

「コアラの餌代は1日で2万4000円、一年で1000万円。人生ってなんなんだろう」

「藪から棒になんだ。さつさとスタンドアップ！」

真摯な訴えにしずしずと立ち上がった彼女と入れ代わるよう席につく。椅子に残った体温が朝から不快感を増長させる。

読んでいたハードカバーを小脇に抱えた稲葉冥利は神妙な面持ちで、カバンから勉強道具一式を机に移す結城にぼそりと語りかけた。
「想像力は知識よりも大事だ。ってアインシュタインが言ってた。想像力に限界はないって」

「それは愉快だな。学生の本分は勉強ですってアインシュタインさんに言つといて」

「あらゆるものには輝くダイヤが隠されている。ってエジソンが」
「電子回路がよくわかんないってエジソンさんに言つといて」

「とにかくこの世に生まれたからには、何かひとつ足跡を残したい、って野比のび太が、」

「さつきからお前はなんなんだ」

朝から要領の得ない嫌がらせに軽くイライラしながら顔を上げた結城の視界に、稲葉の持つている本のタイトルが飛びこんできた。

『人にやる気を出させる名言集』。

「お前意外と型からはいるタイプだな」

椅子の横に立つ稲葉は小首を傾げた。身長差は逆転し、いつもは見下す彼女に見下されながら彼はため息をつく。

「昨日の話か？」

「うん。返事を聞かせてほしい」

「きつちり断つたはずなんだけど」

「一晩考えてほしいとお願いした。考えてくれた？」

「人の話をきかないな、お前は」

口で言いつつも、まっこうから拒否することが出来なかった。

二人でアイディアを出し合って、小説コンクールに応募する。それ自体は億劫な頼み事に他ならない。

心の出っ張りに引つかかるのは、昨日の帰宅時、四組の日向葵に言われた言葉の方だ。

忠告は『稲葉冥利とは関わるな』だったが、意味とは真逆な好奇心が彼を支配していた。

無聊の慰めに小説を綴り、そのついでに『稲葉冥利』と関わり合いをもつ。

「いいぜ」

気まぐれというより、怖いもの見たさ、結城がとつた選択肢がどんな結果をもたらすか、この時点では誰にもわからない。

「お前の暇つぶしに付き合ってやる」

「ほ、ほんとっ？」

「ああ、ちょうど退屈してたところだしな」

声をワンオクターブ高くして彼女の瞳はきらめいた。

「私たちが組めばきつとすごいものができる」

「その自信はどっから来るんだよ」

不浄なものを寄せ付けない純粹な光を帯びた瞳、それに見つめられて、彼はたまらなくなり目をそらした。

「言っておくが俺らはズブな素人なんだからな」

「風は私たちにふいている」

真剣な表情でよくわからないことをぼそりと呟き、稲葉は結城に背中を向けた。

「あ、おいどこに行くんだ？」

「本を返してくる」

どうやら図書室でわざわざ借りてきたらしい。

「放課後から打ち合わせを開始しよう。なんだかすごいものを生み出せそうな予感」

教室から姿を消した稲葉を見送りながら、結城はやっぱりこの女

はどこかおかしいな、と再認識した。

まあでも女子と接点を持つのは悪くない。

稲葉が姿を消すと同時に結城の机は、生き残りに群がるゾンビが如く男子の一団に取り囲まれた。彼らの表情はみな嫉妬と羨望に支配されている。

「どういう事情だ？」「脅迫か？脅迫してんだろ？」「死ね！」

呪詛のような嘆きの声を、結城は「ふっ」と鼻で笑い飛ばし、

「どうやら俺のモテ期という名の獣が目を覚ましたよう……へぶさっ！」

意味深な呟きに、無数の鉄拳制裁が加えられた。

「あのミステリアスな美少女稲葉冥利が無関心のどん詰まりこと結城裕也と仲良く会話するなんてっ！？」

男友達を取り乱しているのをみて、こういう役得もありだなあ、と結城は思った。

「まあお前にもいつか、な」

「くう、上から目線でバカにしゃがってえ！」

半泣きになる友達を無視し、結城は気分よく大口を開けて欠伸をする。涙で視界がにじむより早く、別の男友達に頭を叩かれた。

「って、なにす んだよ」

「うるせえ、さっさと仕事しろ、今日日直だろ！」

「ああ、そういえば。でも朝はやることないだろ」

授業に使った黒板を綺麗にしたり、移動教室の鍵を取ってきたりと、HRを待つまでの間に仕事はない。強いていえば日誌を記すことだが、それは時間が余った時でもできる。

「黒板汚れてんだろ。きれいにしろよ」

「朝の段階で汚れてるなら昨日のやつ責任だろ。知らねーよ」

「減らず口たたくな。ほれ！」

「ただの嫌がらせじゃん」

ぶつくさ言いながらも立ち上がり、クリーナーの上に放置された

ままだった黒板消しを手にし全体を見渡す。

「別に汚れてなんて、……っ!？」

言葉を失って半歩後ずさった結城は、教壇から足を踏み外し尻餅をついた。

手に持ったままの黒板消しが床とぶつかり合い、白い粉塵が教室の空気に溶けていく。

痛みも忘れ唇を震わせる彼を、沸き起こった爆笑の渦が包みこんだ。

「すげー音！大丈夫かよー」

、天誅!」「ドジだなあー結城、しつかり」

彼らの声に半笑いで応えながらいそいそと立ち上がった彼はまっすぐ黒板に書かれた二つの言葉を見つめる。『レム睡眠』『ノンレム睡眠』、波線はなかったが、意識は混乱の渦に叩きつけられる。

耳の中で日向葵の忠告が響き渡った。

「物語を始めるにあたり」

人気がなくなった校舎、その日の単元がすべて終わり、教室は昨日と同じ静寂に包まれている。

二年一組に二人の生徒が残っていた。

稲葉冥利はキャスターのついた教師用オフィスチェアに腰を下ろし、机を挟んで自分の席に結城裕也はつく。お見合いのように向かいあうかたちだが、彼の精神は落ち着いていた。

「まず決めなきゃいけないのはジャンルだ」

結城の言葉に、稲葉はふんふん頷きながらA5サイズのノートに『ジャンル』と書き付け、大きく丸で囲った。

「それなんだ？」

「ん？」

「いや、そのノート」

その問いかけにしたり顔で応じると、ノートをたてて表紙が彼に見えるようにした。ピンクの大学ノートのタイトル欄には『作戦ノート』と綴られている。

「意見を分かりやすくまとめるために用意した」

「ああ、そう。ヤル気満々だな」

「結城はどんなの書きたい？」

「俺はべつになんでも。まかせるよ」

「うーん」

稲葉冥利は顎にシャープペンシルのノック部分をあて、語尾を間延びさせた。その可愛いらしい所作に精神を揺るがされないよう平常心を保って、後頭部をぼりぼり掻きながら結城は質問した。

「その前に聞き忘れてたんだが、コンクールってのはどんな小説を対象としてるんだ？」

「え？」

「だから色々あるだろ。出版社の得意なジャンルとか、応募要項とか。それに合わせた話作りをしなくちゃ」

「た、対象作品？」

「そついや賞金とかってでんのか？締め切りはいつなんだ？文字数とか決められてんだろ？」

「あ、えつと、その」

「どうせ中学生にできることなんてたかがしれてるし、とりあえずは入選を目指そうぜ」

「う、うん。そうだ。ベストを尽くすに越したことはないけど、いまのうちに限界を知っておくのも大切」

「それで」

歯切れが悪くなった稲葉にクエスチョンマークを浮かべながら結城は尋ねる。

「コンクールの名前は？」

「うん、つと」

「もしかして忘れたのか？ならとりあえず出版社とか最低限わかること言ってみ。いま携帯で調べてみるから」

「そ、そういうわけじゃなくて。えーと、い、稲葉冥利賞ー、なんて」

「……」

「だ、だめ？はは」

「おい、お前」

彼の矢継ぎ早の質問に稲葉は目をしばたせる。

「まさか、なにも決めてないのか？」

「うん」

その可愛らしい首肯に、結城は呆れてモノが言えない、というありがちなフリーズをリアルで体感しながら、殺意抑えこむよう額に手をあてた。

「怒るかもしれないから黙ってたけど、正直に言う」

捨て鉢になりかけた彼とは対照的に決意をきめたような語気で彼女は告げる。

「私は『特別』になれるならなんでもいい」

「どういう意味だ」

「連綿とした退屈な人生を終わらせたい」

まるでオペラでも演じるような手振りで彼女は立ち上がった。

「このままダラダラ生きてても予定調和なレールを走って、終りを迎えるだけ。死にたくないから生きてる得るものない人生」

直球な心情に結城は舌打ちが漏れそうになった。

今さらこいつは何を言い出したんだ。わかりきったことじゃないか、焼け野原時代ならまだしも今時の中学生は自分達のおかれた現状を冷静に判断し、褪めた将来設計を漠然的とはいえ終えている。それを嫌だと夢物語に浸るやつを口では応援してるよと言いつつせせら笑うのが俺らの年代のコミュニティーだ。

「手っ取り早く殺人でもしてろ。少年法でそこまで深い罪にはなら

ないし、少女Aをメディアは楽しく分析してくれるぞ」

簡単に非日常が味わえるお手軽な提案だ。

「それも考えた」

思わぬ切り返しにゾクリと粟立つ。

引かせる為に言った冗談なのに、稲葉の瞳は本気だった。

「だけどせいせい2週間ワイドショーを騒がせて、よくある犯罪の一つに仲間入りするのが関の山。どんな残酷な手段を用いても一過性な行動じゃ着飾った特別はすぐに剥がれる。それに誰かを傷つけるのはセンスがない」

「お前は何になりたいんだよ。そんな特別とやらの憧れるならアイドルにでもなつたらどうだ？」

結構いいとこまで行けるだろうよ、とは言わなかったが、わりかし本気だった。

「幸福とはなにか。なにをして喜ぶのか。わからないまま終わる。そんなのは嫌だ」

どこかで聞いたことのあるリズムミカルな発言だったが、あえて言及はしなかった。

「探して、考え、方法も手段も未だにでないけど、今こうして悩んでいる私自身の名前を、誰かに覚えていてほしい」

「つまりお前、俺に……」

「そうではなく」

男心を弄ぶな、と結城は思った。

「書籍としてカタチに残るのは目的としては合致する。全国あまねく人間に『生きていた証』をたらしめる」

「なんでお前の名前を売るのに俺が手を貸さないといけないんだ」
「嬉しかった」

「は？」

「私以外にも、『特別』を探している、『変化』を求めているヒトがいたことが」

「おいおい一緒にすんなよ。俺が書いてたのは本当に暇つぶしで」

「結城となら、私は変われると思った」

いきなりの恥ずかしいセリフに、次の弾として装填されていた文句が「んぐっ」と音をたてて喉の奥で暴発した。

「私とじゃ、ダメ？」

やっぱり稲葉冥利は、男心をくすぐるのがうまい。

ドライな性格とはよく言われるが、殊勝な彼女の声に、結城に残された選択肢は一つしかなかった。

「ま、やれるとこまで頑張ろうぜ」

四組のヒマワリの言っていたことが、少しだけわかった気がした。

交渉―哄笑

誰かと意見を出し合いながら創作活動をするのは初めてだし気恥ずかしいものがあつたが、その点にさえ目をつむれば実に有意義で楽しい時間だといえる。放課後女子と二人きりという、ある種あこがれなシチュエーションの真っ只中にいながら、心に起こるのはよこしまなものではなく、まっさらな画用紙に向かったときと同じ高揚感だつた。

「互いに好きなジャンルを言い合つてそれで決めよう」とはいえ話は進まず、未だに外堀すら埋まつていない。

「そつだな。稲葉はどんなのが好きだ？」

「私は純愛モノが好き」

「……」

彼が触れたことのないジャンルだつた。稲葉の持つノートには短く『恋愛』とだけ記される。

「結城は？」

「俺はスプラッタ、ホラーかな」

「……」

彼女が触れたことのないジャンルだつた。

無言になりながらも律儀にノートには『ホラー』と綴られる。少女の生真面目さが感じられた。

どんなに話合いが楽しくても、会議は進まなければ意味はなく、なにも成さずに終わるのは情けないにもほどかある。

段階ごとにまとめに入らなければ、完成させられるものもできるわけがない。そういう思いがあつてか言い出しつぱは、両手をぱんと叩き合わせ楽しげな音をたてた。

「それじゃ2つを混ぜて純愛ホラーにしよう」

「はあ？」

「臓物脳漿撒き散らされた荒野で芽生える恋、素敵」

「いや無理だろ。どうやったって無理だろ」

「だからこそ斬新。ハリウッドとかでピンチを切り抜けて結ばれる、吊り橋効果的現象」

「いいか、よく言われるが、『そのアイデアは誰も思いつかなかったんじゃない、思いついたけどやらなかった』んだ。意味わかる？」

「ん、なんとなく」

感性はバラバラで、意見が合致する方が珍しい。そんな状況で小説作りなんて遠い夢のように思えた。

「好きなものをぶつけ合うのは難しいね」

一息いれる穏やかな声で彼女は呟いた。

「そうだ！それなら、お互いこれだけは譲れない、絶対にいれてほしい要素をあげるのはどう？例えば男女の恋愛要素など」

「なるほどいい考えだ。俺は、そうだな。安っぽいと笑わないで欲しいんだが、異形、……フリークスなんか欲しい」

「うん、アイスピック男のようなやつか。うんうん。なかなか興味深い」

腕を組んでごくごく頷く稲葉冥利に「お前は？やっぱり恋愛要素か？」と尋ねる。

「私？私は」

少し頭をひねってから口を開いた。

「キス」

「きす？接吻？」

「うん」

「凄く簡単なキーワードだな」

「ストーリーの終わりに欲しい。完結を、フレンチキスという切ない思春期の終わりで飾る。胸に突き刺さる余韻が作れると思う」

「……まあそこらへんはおいおいな」

キラキラと夢見る少女の瞳に無数浮かんだ反対意見を述べるほど、彼は子供ではなかったが、胸に去来するのは一抹の不安、あ、これダメだ。何回か味わったことのある挫折感が胸をかすめる。このま

までは話合いで終わり、物作りまで入らない。将来振り返ってみたときただのイタい歴史にしかないし、一度やる、協力すると言った以上は最低ラインとして完成まではこぎつけたい。

さてどうしたものかと頭を悩ませていた結城の耳に唐突として明るい声が届いた。

「やつほー、一組の皆さん、こにやにやちほー」

教室のドアを開けて我が物顔で入ってきた女生徒に結城はもちろん稲葉も目を丸くする。

ふわりと揺れる金髪のショートボブ、昨日駐輪場で日向葵と名乗った少女だった。

「あなたのおはようからおやすみまでの暮らしを見つめる、二年四組の風雲児、ひつまわりでーす」

バチリとウインクをかまし、日向は適当な椅子を引いて、結城の机にくっつけるとそれに腰をおろした。

ぽかんとしていた稲葉がやがて冷淡な口調で口を開いた。「あなた誰？」

「むっふふ、私の名は日向葵、通称ヒマワリ。そこで呆けてるユーの唯一無二にして一番の親友。ただし恋愛感情はないから安心してね」

「ユーユー……」

稲葉はぼそりと呟いて下をうつむいた。選手交代とばかりに結城は四組の来訪者に声を荒げる。

「なにが親友だ、昨日会ったばかりじゃねえか」

「友情に、時間は関係ないんだぜ」

鼻につく言い方にイライラが加速する。

「昨日あれだけわけのわ」

「話は聞かせてもらったあつ！」

言葉は突如として大声を上げた日向に遮られた。

「協力するよ！冥利ちゃん、ユーユー！」

「は？」

日向以外の二人はきょとんと顔を見合わせる。

「小説を書くんでしょ？んーファンタスティック！頑張っちゃようー」

「お前その話誰から聞いた？」

「なんで私の名前知ってるの？」

「はっはっはっ、嫌だなユーユーが全部教えてくれたじゃないか」
「そうだ、っけ？」

「そうなの？」と責めるわけではない柔らかな眉尻で稲葉が顔を覗きこんできたが、昨日の会話を思い出すにそこまでの詳細は漏らしていない気がする。

「ねっ！？」

強調された念押しに、内心疑問に思いながら、「ああ」と曖昧な相槌をうつ。「と、いうわけで！よろしくーねっ」

「よろしくじゃねーよ、勝手に話を進めんな」

蛍光灯の光を浴びて輝く金髪、他を威圧する派手目な少女に辟易としている稲葉に代わって、精一杯に声を出す。

「お前が参加しなくても充分メンバーは足りてんだ。いらねえよ」

「あ、ひどい、心外だなあー」

ちつとも気にした風もなく彼女は続けた。

「いいことを教えてあげよう」

「知るか、帰れ」

「冥利ちゃんとユーユーが協力しあってアイデアを出す。当然二人は読書好きでしょう。これまで相当読んできたに違いありません」
再び二人はきょとんと顔を見合わせる、こいつはなにが言いたいんだ。

「だけど私は本を読んだことはありません！」

「だからなんだよ！むしろいらねえよ！つつかそれマジかよ」

カッコよく言い放たれた言葉はあまり誉められたものではなかった。

「活字拒否症っていうのかなあー、短いのかレポート類は大丈夫

「なんだけど長い繋がりのある文章読んできると頭が痒くなるんだよねー」

「体のいい名前つけてごまかしてるだけじゃねえか！ほんとの活字拒否症の人にとりあえず謝っとけ」

「他のストーリーに引っぱられないからこそ、私の意見は必要になるんだと思うよ」

無視して続けられた彼女の一言は領けられる部分がある分、質が悪かった。たしかに文章を綴っていて、感銘を受けたストーリーに引っぱられそうになることはよくある。そういう点では彼の自作小説アイスピック男は完全にオリジナルとは言えない。

「わ、私もヒマワリさんの意見に賛成」

今まで黙っていた稲葉冥利がぼそりと呟くように声をあげた。

「多様な意見を取り入れるという点で仲間が必要だと思う」

「やったー。さすが冥利ちゃん、話わかつるー」

「ゆ、ユーユーはどう思う？」

たどたどしく呼ばれたあだ名に、こいつ地味に気に入りがったな、と思いつつ息をつき、

「好きにすれば」

とヒマワリの参加を許可した。

「やつほーい、よろしくね、冥利ちゃん、ユーユー」

眩いばかりの笑顔を振りまいて日向葵は目を線にした。

夢の日向が選んだ『ユーユー』というあだ名を、現実世界の彼女まで同じ風に呼ぶとは、今朝の夢は予知夢だったのかと密かに思った。

「それで、それで。どんな話にするの？」

「まだ考え中。二人で相談してた」

早速友達と恋バナするような調子で尋ね、稲葉が平坦だがしつかりとした口調でそれに応える。

「どんな話にしようとかもないの？」

「うん。まだ。ヒマワリさんはどんなジャンルが好き？」

「ヒマワリでいいよ。あたしはねー、うーんコメディ映画が好きだよー、冥利ちゃんは？」

また新ジャンルかよ。

「私も冥利でいい。私は純愛モノが好きだけど……コメディってことはお笑い？」

「ザツツライ！嫌な気分がぶっ飛ぶのさー」

「うん。私も好き」

頷きながらノートに『コメディ』と書く。律儀なやつめ。

「でしょでしょ？というわけで私から提案がありまーす」

近くににいるのにも関わらず教室中に響きわたるような大声で彼女は続けた。

「日常ギャグにしましょー」

その提案に「はあ？」と声が出てしまう。

「ほらサザエさんみたいなやつ。これなら小ネタ盛り込めばそこそこ読めるものになるし、なによりトレンディーだよ」

「サザエさん、トレンディーなの？」

首を傾げる稲葉に代わり、

「小説向けじゃないだろ」

独壇場になりそうだったので慌てて声を割り込ませる。

「起承転結がなくちゃとてもじゃないが『読ませる』文章にならないぞ。日常系は漫画やアニメだからできるんだ。畑が違う」

「いやいやユーユー。伏線とか考えない方が中学生には向いてるって。3人でギャグ考えればなかなかのものが出来るだろうし」

「反対だな。書いててつまんない。なにより今の俺たちの力量じゃ日常を上手く書けるとは到底思えない」

「そこらへんはほら、助け合いで華麗にカバー、ね！冥利」

突然話を降られた稲葉冥利は曖昧に「う、うん」と頷くだけだった。まだ日常ギャグの定義について考えているらしい。

「んじゃ訊くけど仮に『日常系ギャグ』で行くとして舞台はどうするんだ？東京都世田谷区か、静岡県清水市か？」

「学生の日常の方が描写しやすいよね。リアルタイムだし。となる
とクラスか部活か委員会。年代は、高校がポピュラーかな」

「ありがちでやり尽くされてるわ」

「あたし達は経験してないぶん理想としての高校を描けると思うんだよ。例えば部活。羽路高校に変な部活があつて、うーん娯楽ら部みたいな？その人たちの日常を面白おかしく描写して」

「どこに需要があるんだ、そんなもん。娯楽つてなんだよ、意味わからんわ」 息を吐いてから彼は続けた。

「俺は日常系には賛成できん。小説なんだから、文字でしかできないことをやるべきだろ」

きつぱりとした反対意見に日向は「むー」と唇を尖らせた。

「ミステリとかの叙述トリックを入れるってわけじゃない。小説なんだから『ありえねー』って展開が欲しいんだ。何が悲しくて学生が学生の日常を書かなくちゃならない、日記帳でやれ」

「なるほど。冥利はどう思う？」

日向は横目でちらりと稲葉の様子をうかがった。

「私もユーユーと同意見、かな。嫌いではないけど、やっぱりストリーで魅せたい」

「2対1じゃしょうがないねー」

そう言つと彼女はおどけるように机の上につくりと伏せた。

「そう悪いアイデアじゃない。私もヒマワリの意見で思いついたところがある」

「ふーい、なあに？」

なぐさめるような声に日向はちらりと腕の間から目線だけ覗かせた。

「ここまで来たら、ぜ、是非とも、部にしたい」

なにとつち狂つたこと言つてんだ、こいつ。

稲葉の突拍子のない発言に日向は目をまるくし、結城は「はあ？」と間抜けな声をあげていた。

「3人メンバーがいるなら、も、もう部活にしてもいいと思う」

たどたどしい口調は彼女の僅かな羞恥心の現れだろうか。

「それってリアルな話？」

「うん。私たちのこと」

「ユーユーと冥利とあたしの3人で部活を発足……」

おいおい勘弁してくれよ、と厄介事が苦手な結城が声を上げる前に、

「いいねえ、それ！」

日向は賛成の声を上げていた。

「うちの中学たしか文芸部は無いし、ぴったりだよ。部なら堂々と気兼ねなく行動できる上、集合場所にも困らないからね」

「認めるかーっ！」

とんとん拍子を防ぐため、結城は腹の底から声をだし、乗り気な二人の意見の間に割り込んだ。

「俺らの目的が文芸といえるか？よくて作文だろーが」

「べつに作文部でも私は一向に構わない」

稲葉にぴっしやりと言いかえされて、言葉を失いそうになりながらも、部活申請における重要な要件を思い出し口を開いた。

「だ、だいたい設立には4人必要だし、こ、顧問の先生だって」

そんなのに所属してみる、人生の汚点だぞ、彼の精一杯の説得は続く。

「同好会なんてまっぴらごめんだからな」

さすがに人数の問題は簡単には解決できない。これでなんとかなつたと肩を落とし安堵した彼に悪魔の声が降りかかる。

「残り1人くらいあたしがなんとかするよ。あてならあるしね」

ヒマワリ、余計なことを。

「それほんと？是非お願いしたい」

「はいはい。まかせなさい。残る問題は顧問だけだけど、まあ、なんとかなるでしょー。作文部の設立は決まったも同然だね」

「……嬉しい」

ほんのり頬を桜色に染めた稲葉とは対称的に結城の顔は青に染ま

っていった。

断固拒否の姿勢をとったところで流れと彼女たちの熱意に押し切られるのが目に見えていたからだ。

「と、とりあえず今日はこれくらいにしないか」

「うーん、そうだね。もう遅いし」

時間をおいて頭を冷やしてもらおう、という思惑を含んだ提案だったが、日が暮れたという理由で許可され、今日は解散ということになった。

空想世界の R i g h t - o n

ガラス戸を押し開けた途端、夜の匂いを孕んだ初夏の風が結城の肌を優しく撫でた。青々とした樹木は傾きかけた日差しに照らされ色鮮やかに揺れている。

「それじゃ俺はチャリだから」

「うん。バイバイ」

エントランスで二人と別れ、駐輪場に向かおうと校門とは逆の方向に歩きだす。

「あ、あたしも自転車なんだ。それじゃね冥利」

「また明日」

やり取りが終わったと思ったら、軽快な足音とともに背中をバシッと叩かれた。

「まってよ、ユーユー」

振り向くと、無駄ににこやかな日向の顔がある。

「お前チャリ通か？」

確かに日向と昨日始めてあったのは駐輪場だが、自転車を停めている風には見えなかった。

「いやあはっは、細かいことはいいいじゃない」

一笑に付す彼女にイラつきながら、結城はため息をついた。

「それでも今日は余計なことをしてくれたな。頼むから平穏な日常を引つ掻き回さないでくれ」

「まあまあ、作文部いいじゃない。それはそうとユーユー、見事に忠告を聞かなかったね。あたしちよつと感動しちゃったよ」

「あー、俺がなにしようが勝手だろうが」

「いやはや、ごもつともごもつとも」

彼女は軽やかに足をあげ、歩みを進めている。

「これから先、冥利と付き合っていくつもりかな？」

「さあな。とりあえず区切りがつくまで、とは思っているが」

「それじゃあ、いくつか注意をば」

「またかよ」

駐輪場のトタン屋根が見えてきた。自転車に乗る前くらいなら聞いてやってもいいかと、首を動かして彼女の方を見ている。日向は別れたばかりの稲葉をジッと見ていた。

「そんでお前、結局稲葉のなんなんだよ。保護者か？」

「ユーユーは冥利の事どう思ってるの？」

かけた言葉を見られ、小さくなっていく稲葉の背中から視線を外さず真剣な口調で尋ねられた。

やはり百合なのだろうか、とぼんやり考えながら結城は応えた。

「別にどうも。好きか嫌いかなら好きだけど、あの性格は難ありだよな」

「恋愛感情の有無を聞いてるんじゃないよ」

「はあ、やっぱりまた昨日の話をぶり返すんだな」

日向は無言で頷いた。

自転車の前に到着してはいたが、会話を区切ってまでサドルに跨る気は起きず、そのまま立ち止まって向かいあう。

初対面の気まずさはなく、すぐ打ち解けたように思える稲葉と日向の二人。もしかしたら昨日受けた忠告はそれこそ夢だったんじゃないかと考えていたのに。

「もうわかってると思うけど」

日向がゆっくりと口を開いた。

「稲葉冥利は他者を夢に引きずりこむ、協力的な催眠誘導能力の持ち主なの」

英語のリスニングのように穴から穴へ、言葉は鼓膜に意味を落とすことなく通り抜けた。陸上部の走り込みの掛け声だけが、妙に耳に残る。

「は？」

「本人には教えちゃダメだよ、それだけは、絶対に」

「催眠、誘導？」

理解が追い付かず、ぽかんと口を半開きにしている彼に構わず言葉が続けた。

「睡眠時における他者の無防備な精神に干渉し、自らの支配下に置くのさ」

「お前それまじで言ってるの？」

無言になって首を縦に振る日向葵に、結城は思わず肩をすくめた。
「いい歳こいてバツカじゃねーの」

「むっ」

「んなもん稲葉に言ったら逆に俺がヤバいくらいに引かれるわ。頼まれたって言わねーよ」

「はにゃ」

間延びする謎の言語を喋る金髪少女に結城は鼻で笑いながら続けた。

「稲葉が超能力者だったら俺だって時速20キロで歩ける能力者だぜ。他者を夢に引きずりこむ？なんの意味があるんだよ、それ」

「あれ、信じてない？」

「与太話を手放して飲み込むほど、俺もガキじゃないから。フィクションと現実をこっちゃんにすんのはやめようぜ。な。痛々しいぜ、いろいろ」

ぴっしりと言い放ち、カバンの内ポケットから自転車の鍵を取り出す。

「大人になれよ。来年受験生なんだから」

「……ユーユー今朝見た夢覚えてる？」

ピクリと、彼は鍵を右手に持ったまま動きを止めた。

「夢って」

冷や水をぶっかけられたかのような寒気が起こる。

他者を引きずりこむ……？

「まさか、だろ」

類が引きつる。まるで実際に体験したことのように、今朝の夢なら記憶していた。右手から自転車の鍵が滑るようにアスファルトに落ちて、キンと高い音をたてた。

二年一組の教室で、日向や謎の女の子と会話する、当たり障りのない内容の夢。それゆえにうすら寒くなるような現実感があつた。

こめかみから垂れた一筋の汗の玉を拭う彼に、日向は優しく諭すような口調で声をかけた。

「冥利の夢を介したから、昨日の夢はあたしが見てたものと同じになるハズなんだけどね、どう？」

答えはわかりきっている、彼女の言葉には勝ち誇つたようなリズムが含まれていた。嫌な予感が全身を包み込む。

真剣に聞いといった方がいいと赤色灯ともる彼の第六感がアナウンスを流す。

「い、稲葉が夢に他者を引きずりこめる超能力者って、さっき言ってたよな」

「超能力者とは言っていないよ、冥利が持つてるのは不随意性催眠誘導能力。正確に言うなら能力ではなく病、名を冠するなら超眠り姫症候群ってとこかな」

よくわからない単語の連発にくらくら目眩に似た症状が起こり始めていた。

「たしか、ナルトなんとかとかいう居眠り病があつたよな。それとは違うのか？」

「ナルコレプシー？あれとは違うよ。ナルコレプシーの場合は、感情のたかぶりなどが起因して、お化け屋敷で腰ぬけるのと同じように意識を失うんだけど、冥利の場合は、あたしたちの睡眠となんら変わったところはないからね。うーん、やっぱりユーユーの言うとおり超能力の色合いの方が濃いかな」

「他者を夢に引きずりこむ、って」

半分も理解できなかったが、寝言を言っているようには思えなかった。

「まだ詳しく解明されてないんだよねー。他者を巻き込む夢なんて前例がないし、やっぱり手っ取り早く『超能力』にカテゴライズして『超心理学』の分野に回した方がいいかもしれないね」

「わりいなに言ってるのかわかんねーや」

「そうだなー。これはあたしの持論なんだけど、冥利の場合、レム睡眠時に表れるPGO波とは別の脳波が、他者の感応性を高める働きが、距離や数を問わず発生していて」

認識出来ない情報はただ空気を震わせるだけで、結城の脳に届くことはなかった。

「もしくは、睡眠時でも機能している聴覚や嗅覚に何らかの影響を与えているのではないかとあたしは考えている。ただこれだと意図した夢を見せるのは可能かもしれないけど、オンライン的に内容を共有していることに説明がつけられないし、」

やっぱりなに言ってるのかわからない。

「だけど厄介なのはそこじゃない」

厄介なのはお前だよ、と言いかけて、口を嚙む。

「冥利の夢は現実に伝染するんだ」

「はあ？」

「リヒテンベルグの放電像として有名なキルリアンの写真なんかは蒸散する水分を捉えたもので生体エネルギーではないらしいんだけど、物質にはあたしたちじゃ計り知れない何かしらの力が存在していて、冥利の睡眠時念波は、これは多大な影響を与えるんだよ。…

…無理やり説明してるだけだからあまり気にしないでね」

現実に影響、という言い回しに、黒板に書かれた文字を思い出した。夢でヒマワリが綴ったものが、現実の世界でも存在していた。

「お、お前なに言ってるんだよ。稲葉が世界が滅びる夢を見たら現実もそうなるって言ってるのか？」

「そこまで大々的な影響は望めないけど、大げさな言い方をすればそうなるかな。少なくとも人間の脳を破壊するくらいの力はある、と予想される」

返答に結城裕也の平凡な脳みそは思考を放棄し、手っ取り早い解決策を導き出した。

「……あのさ、言い方悪いかもしれないけど、稲葉がそこまでヤバいやツだったら、殺した方が」

「主人公だったら絶対に言わないような発言だけでもっともだね」

少しだけ呆れながらも日向は寂しげな笑顔を浮かべて続けた。

「とはいえプラス面も考えたら、一概に悪いとは言えないんじゃないかな。例えば軍事面、非致命的兵器として考えれば電磁周波数兵器や音響装置より安全だし、医療現場に利用すれば麻酔より楽に精神を緩和させることができる」

日向の説明の仕方に結城は違和感を覚えた。彼女の言い草ではまるで新薬の効能を実験結果に基づいて説明しているみたいだ。

「だけどもまあ安心してよ。冥利の精神がフレない限り、よっぽどなことは起きないから」

「危険には変わりないんだろ？」

「ストッパーとしての役割があるからね。安心安全愛情ー」

「ストッパー？能力、いや症状を抑制する薬でもあるのか？」

「んーん。あたしたち」「は？」 神経を繋いだヒューズが飛びかかる。理解できない説明を受けるのは数回目だが、文章がつながってないのは確かだ。

「冥利の夢に侵入し、現実被害が及ばないようにコントロールする役割をあたしたちは担ってるわけ。多少実験的に小さな干渉を行ったりはするけどね」

「あたしたちって、……昨日の女もか」

夢に現れたポニーテールの少女を思い出す。

「彼女もそう。それにしても、まさかユーユーまで夢に来ると思わなかったよ。こんなこと始めてなんだよ」

「一体俺がなにをしたってんだ……。お前らがしっかりガードしてくれれば」

「あたし達はいくまで冥利の夢に干渉できるという能力を持ってる

ただだから」

カラスの鳴き声が未来を暗示するかのように茜色の空に響きわたった。

「超眠り姫症候群はあくまで実験的段階をでないし、危険といえばそうなんだけど安全に気を配り最大限の効果を発揮できるよう調整を」

「おかしいだろ」

「え？」

「あ、いやなんでもない」

喉まででかかった言葉を飲み込んで、彼はギュツと握り拳を作った。

そんな彼を慰めるように日向が口を開く。

「……おそらくユーユーは一定の区切りがつくまで冥利の夢にとらわれ続けると思う」

「区切りってなんだよ」

「さあそれはわからないけど、単純な例で言えば、彼女に飽きられることかな」

無理やりおどけるように歯を見せた彼女の笑みはぎこちなく動く歯車のようなだった。

「手っ取り早く無関心の対象になればいいんだな」

「あれ？嫌なの？頼りにされてる印なのに」

「ほざくな。どうすりや後腐れなく稲葉と縁が切れると思う？」

「うわあ、君って最低だねー」

「お前らに言われたくないな」

先ほどから感じていたイラつきが、眉間にシワとなって現れる。
「……どういう意味？」

落ち行く夕日に照らされた日向葵は、その光に溶けるような弱々しい声音でそう尋ねた。

「おかしいだろ。まるで稲葉の管理者みたいな言い方」

ぼそりと、だが密度の濃い息と一緒にその言葉突き刺す。

「稲葉はてめえらのモルモットか？反吐がでる」

「モルモット、まさしくそうだね」

普段の明るく剽軽な彼女のイメージとは裏腹に、日向はうつむいて、小さく呟いた。

「彼女は研究目的として今まで縛られて生きてきた」

「嘘臭い話だな」

受験にそなえ多角的に物事を判断するように自分自身心がけている。少なくとも稲葉冥利との投合は気まぐれに他ならない。

「妄想だとカミングアウトしろよ。じゃなきゃ幻滅だぞ」

「残念ながら、それはないってユーユーもわかってるでしょ？」

「まあ、實際目の当たりにすれば否応なしに」

結城は一転明るい口調となるたけ日向を責めないよう、優しく言った。女子を泣かせていいことなどない。

「お前らはお前らで大変なんだろ。てきとーに力ぬいて頑張れ」

「勘違いしないでほしいんだけど、これはあたしの考えじゃなく、あくまで研究庇護対象だった冥利の取説みたいなもんだからね。あたしは職員じゃないし」

「研究ってそんなたまじゃないだろ、あいつは」

「そう、その点は安心して！彼女今は自由の身なのさ！」

「なら良いよ」

かがみこんで鍵をとり、自転車のチェーンを外してハンドルを握る。

「それじゃあ俺は帰る」

「ちよつと待って、まだ説明は終わってないよ」

「稲葉冥利の夢はすごい。……他になにがのこってるんだよ」

「セーフティーとしてのあたしたちの役割とか、冥利の研究対象離脱のプロセスとか」

「明日話をきくから、今日はいい。少し整理したい」

「あ、そう。んじゃまた」

「ああ、またな」

サドルにまたがってペダル漕げば、直ぐに日向との会話は過去になる。

感じた漠然とした怒りに、わだかまりを感じていた。ただの憐憫でも同情でもない、稲葉が好きなわけでもないのに、この胸のムカつきはなんなのだろう。

黙って話を聞いていれば、悪いのは日向じゃないとわかっていても耐えられなくなって、出どころ不明の怒りの矛先を彼女に向けてしまうところだった。

殴ることが許されるなら躊躇なく拳をふるっていたところだろう。

故障中

眠らなければいいんじゃない。

単純な回答だが、その有効性は確かなものといえる。

そうだよ、いくら稲葉が変な力を持つていようと所詮夢の中だけの話、意識を保ってさえいれば関係ない。

明日がづらいが身を守るためには致し方ないと夜更かしを決め込んだ結城は、さっそくゲームソフトを起動した。

指にタコができるまでやりこんだ格闘ゲームだ。対PC相手というのが寂しいところだが、続けてプレイしていくうちに敵も学習して手ごわくなっていく。

夢中になってボタンを連打しているうちに夜が更けた。

「桃ちゃんいいでしょー」

「ヒマワリは勝手すぎます。なんで私がそんな存在意義の薄いクラブに入らなければいけないんですか」

「帰宅部よりは内申点プラスされるよー。桃ちゃん推薦狙いしよ」

「どうしてそれを。な、なんにせよ拒否します」

おいちよつとまで。

ほっぺたをつねってみても、痛覚が麻痺しているみたいで痛いのか痛くないのかよくわからなかった。

「お、ユーユー。ちいーす」

にこやかに片手を上げる日向葵。

「また来たんですか。やれやれです」

桃ちゃんと呼ばれていた少女は軽く肩をすくめて、パイプ椅子に腰を下ろした。

「……なんでやん」

あまりの不可解さに、結城は流暢な関西弁で頭を抱える。

ヨガファイヤを放っていたのに、気づいたら机と椅子が並ぶ簡素な空間にヨガテレポートしていたのだ。その驚愕は言葉では表せら

れない。

「どうやら冥利、クラブ活動にすっごい興味津々みたいだねえ」

日向はオーバーに腕を広げて、自分たちのいる空間を示した。机と椅子とが並ぶ六畳ほどの簡素な空間だった。友達の話でイメージする部室のようなところに、結城達は立っている。

「これが噂の稲葉の絶対領域か……」

自らの心象を知りもしない単語でごまかそうとするがうまくいかなかった。

「くそっ、いつのまに寝ちまったんだ。あんなにMAXコーヒーを飲んだのに」

「無理無理。冥利の睡眠時発せられる特殊な念波はターゲットを確実に捉えるからね。車の運転とかは気をつけた方がいいよ」

「今すぐ覚めろ！ 鳴り響け目覚まし！」

「焦らなくても直ぐ覚めるよ。落ち着いてユーユー」

静かな口調で慰める日向の声はたしかに彼の鼓膜を震わせていて、とても夢だとは思えなかった。

「無事に帰還できるという保証は？」

「大丈夫だって。ストーリー性のない類はすぐに終わるのがルールだからね」

日向は人差し指をピンと立てて続けた。

「そもそも夢ってのはね、ユーユー。記憶の整理整頓なのさ。脳が得た膨大な情報を短期記憶から長期記憶に移し替えようとしているわけ。つまり海馬や大脳皮質に治められている記憶をフラッシュバックさせ記憶を繋ぎあわせる働きを持つてるの。もちろん強くイメージしたことも記憶として夢に視ることはあるから注意してね。例えばそうだな悪魔のトリルなんかが有名かな」

「またお勉強の時間かよ。お前バカそうなのに結構難しい言葉を使うよな。見た目に反して実は頭いいだろ」

「いやあ、それほどでもー」

頭をぼりぼりと書く日向に結城は貶してから誉めたのに、と軽く

息をはいた。

「話をちゃんと聞いたほうがいいですよ、結城さん」

涼しい顔で頬杖ついていた少女が結城に話かけてきた。

「む、桃ちゃんか」

「気安くよばないでください。なにをもってそんなふざけた呼称を用いるんですか」

ポニーテールの少女は柳眉を逆立てて声を荒げた。

「だって俺あんたの名前しらねーし。んじやなんて呼んだらいいんだよ」

「呼ばなくていいです。私も結城さんのことは『あなた』としか呼びませんから」

「コミュニケーションを取る気ねえーな」

妙に可笑しくなって自嘲ぎみに鼻を鳴らした彼の肩にぽんと日向は軽く手を置いた。

「とまあ、夢の役割から冥利の場合を分析したいんだけど」

こいつはまったくブレないな。

「この記憶の整理整頓は時間にしたらほんとに一瞬で、しかも一つが短いんだ。そうなる疑問が一つ出てくるよね」

「なにが？」

ソクラテスメソッドに置ける双方向性が、ぼんやり聞いているだけではまったくいかされなかった。

「ストーリー性のある夢だよ。時間の流れを感じられるでしょ？」

「現在進行系だぜ」

「そう。実はこれ脳が時間性があるものとして処理してるんだ。夢は同時に複数の情報を記憶整理の過程で流すの。現実世界ではあり得ない状況をわかりやすくするための処置といわれてるけどね。実際には刹那に近い時間なんだ」

「ふーん」

「んでストーリーについてはかんたん。例えばユーユー。檻、猿、バナナっていう文字を連続で見たら、檻に入ってる猿がバナナを食

べてんだなーってイメージが沸くでしょ？つまりストーリー性のある夢ってのはそういうことなんだよ」

「おう、まったく何言っているかわからないぜ」

「つまりは速読術を脳が行ってるわけさ。文章ではなく映像なら一瞬で理解できるでしょ？」

話を聞いてなかった結城はどういうだと心の中で突っ込みを入れた。

「冥利の夢も、単なる情報とストーリー性があるものとに分かれるの。冥利の場合、夢ではなく仮想空間を作りだしてるんじゃないかっていう説もあるけどね」

肩をすくめてから続けた。

「ストーリー性があるものに関しては区切りがつくまで終わらないから面倒なんだけど」

「それはやつかいだな。見てればいいのか？」

「だと楽でいいけどね」

溜め息混じりに日向は桃と目を合わせた。

「私たちが参加することが前提で話作られてる場合がほとんどでさ。まあ無理やり割り込んでるからってのも原因の一つだろうけど」

「それじゃどうすんだよ」

「まあ破綻しない程度に」

「演じる、と？」

「簡単に言つとそうだね」

白い机に、3つ並んだパイプ椅子。現実的な光景に稲葉冥利の恐ろしさに、いつそ笑いがこみ上げてきた。

「まじかよ。そりゃごころうさんだな」

「まあこれがタ方言い損ねたセーフティーの役割なのさ。現実に影響がでないよう綻びの調整っていうね」

「ぷぷ、じゃ、なに？稲葉がメルヘンな夢みたらお前ら妖精になつて空とんじんの？」

「夢の中じゃなんでもござれ、だよユーユー」

稲葉が男子中学生じゃなくてよかったな、と結城は思ったがセクハラ発言になるので黙っておいた。

「まあいいや。なにせよ俺には関係ない話だ。寝る」

パイプ椅子を引いて机にふせようとす。触感が手のひらを伝わり、改めて現実世界と遜色がないことを再認識した。

「他人事ではないのです。結城裕也」

ちらりと顔を上げると、向かいに座る桃と目があった。すつきりとまとまった小顔は、どこことなく稲葉冥利に似ている気がした。

「桃ちゃん俺に話かけた？」

「だから、ちゃん付けで呼ばないでください」

「んーじゃー桃？」

「気持ち悪い！」

面と向かってそんなこと言われたのは初めてだった。ましてや相手は女の子だ。

「だから、代名詞で。……脱線しました。あなたも私たちのこと笑える状況ではないこと、おわかりですよね？」

「……」

薄々感づいてはいたが認めたくなかった。

「あなたは夢にとらわれてるんですよ」

「うん、そうか、なるほど」

こくこくと頷いてから、

「助けてください！」

おでこをガツンと机につけて彼は頭を下げた。

「と、突然なんなんですか？」

「結城裕也の人生に非日常はまっぴらごめんなんです！なにとぞ脱出方法を！平に平に！」

「し、知りませんよそんなの。自分の意思に反して冥利さんの夢に干渉する人なんて初めての事例なんですから」

「ち、つかえねーな桃ちゃん」

「もういいです。好きに呼んでください」

注意するのに疲れたらしい桃は、小さく息をはいた。

「ん、ちよつとまで。お前らは自分から稲葉の夢に干渉してるのかよ」

問われた彼女はちらり日向の方に視線をやり、そのアイコンタクトで代わりに日向が口を開いた。

「あたしたちは8年前にそーゆー超能力を手にいれたのさ。夢に入りこめる能力をね。んで、この力を使って調査してるわけ」

「うひょ超能力。ついにきたか」

いまでも十分突き抜けた展開なのにいまの彼女の発言は、結城のテンションを妙なところで上昇させた。

「そこらへんはおいといてだよ。一つ忠告をさせてもらっけどね」

「またか。それ好きだな」

「ユーユー、夢の中で突飛な行動は慎んでね」

「どういう意味だ？」

「今日みたいな端的な時はいいけど、ストーリー性がある夢のとき流れに反した行動をとったりしたら」

突然視界がぐらりと揺らいた。

世界の変貌に「あつ」と声をあげる。壁や天井が、ぶつぶつと虫食いが発生するように部分部分消滅していく。

「最悪世界が滅びるから」

「はああ？」

それが夢の終わりだと気付くのに時間はかからなかった。

【君島は普通の男の子だけど私にとっては特別な異性で、都心部に出ると聞いた時、私の胸にはぼっかりと丸い穴がaita。

排気ガスで黒ずんだ未来はくすぶっていて、ただ漠然とした焦燥感だけがその時の懸案事項だった。

なにもかまかなぐり捨てた価値観に「さよなら青春」と、桜の蕾に問いかけるくらいの声量で呟くと、彼は「そんな言葉で過去にすんなよ」と照れ笑いを浮かべそつと私の手を握った。

しつとりと湿った手のひらだったが不快感はなく、不思議と心が温かくなるような体温だった。」

「どう？」

「どうって……」

最近みるようになったシリーズもの変わった夢（そう思うことにした）に頭がいつぱいの結城を、ボタンのように丸い稲葉冥利の瞳が見つめていた。

放課後また呼び出され、手渡されたのは砂糖菓子のように甘い小説の冒頭、彼女が好きだと言っていた『純愛もの』のはじめの部分だった。

手書き、ということはオリジナルなのだろう、なるたけ当たり障りのない言葉を選びながら批評を開始した。

「なんかくどくないか？文章が」

「そうかな。例えばどこが」

「俺の個人的見解だが、比喻表現が全体的に」

「そう」

しょんぼりと肩を落とす稲葉を励ますように結城は声をあげた。

「でも俺が恋愛小説読まないだけだからな。純愛は好みじゃないんだ」

「それなら仕方ない。それはそうと今日こそはジャンルを決めよう」

「ああそうだな」

一組の教室にいるのは結城と稲葉の二人だけで、日向は「さきやつてて」と最初に顔出しただけでどこかに行ってしまった。自分から参加を表明したくせに無責任な、と思ったが、稲葉の前じゃどつちみち夢のことを確認できないのだから変わりはないか、と少年は小さく一人ごちた。

日向といえば昼休み、友人の一人が「ヒマワリさんとどういう関係だこら」と頭を小突いてきた。なんでも昨日駐輪場で立ち話をしていたところを陸上部に目撃されていたらしい。

「ふっ、どうやら第二のモテ期という名の獣が目を覚ましたらしい

な」と適当なごまかしをすると、割と強めに首を絞められた。

「ご意見ご感想、続きを読みたいという方をお待ちしています」

「お前はなにをやってるんだ稲葉」

「こういう時テレビだと下に郵便番号が表示されてるはず」

自身の鎖骨あたりから地面を指さして、それを左右にふるという妙な行動をとる稲葉を白い目で見ながら結城は静かにノートを広げた。

「おもしろくない冗談だ」

「そう。残念。薄々気づいていた」

ならやるなよ。と二人で溜め息をつくと同時に教室のドアがガラリと開かれ、日向が明るい声をあげ入ってきた。

「やつほーご機嫌いかか！」

「上々」

「単語じゃ嘘くさいよー」

やって来た鬱陶しい台風は、意味もなくくるくる回転しながら、また適当な椅子を二脚つかむと、結城の席に歩みを進めた。

「……二脚？」

「紹介します。期待のニューカマー」

彼がクエスチョンマークを浮かべると、ポニーテールの少女が一組の教室に入ってくるのはほぼ同時だった。

「桃ちゃんです」

「……どうも」

そこに立っていたのは夢でみた少女だった。

狼煙をあげて

存在意義を見いだせない、というか存在すらしていない作文部（仮）に新たな入部希望者がやってきた。

「二年四組、桃と申します。ピノとカントリーマームが大好きで、これらは神の創りし食べ物だと考えています」

ふざけた自己紹介に、彼女にはやる気がないのだと、頭の片隅で理解した。白い肌に黒い瞳、まるつきり温室育ちといったような少女だったが、髪型は活発さをアピールするように後ろでまとめられ、小さな輪郭を強調している。

会ったことはない。ただし見覚えはある。

初対面で「夢で会ったことがある」なんて歯が浮くようなセリフを吐けば、自分自身のアイデンティティの崩壊を招くと判断した結城はひとまず口を閉ざすことにした。

入室事から露骨に不機嫌さをアピールしている桃の横で、ヒマワリが片頬を吊り上げニヤニヤしている。無理やり連れてこられたのだろうと結城は推測した。

「私は稲葉冥利、その男子は結城裕也ことユーユー。よろしく、桃ちゃん」

自身の不本意なあだ名が呼ばれると同時に会釈する。

「私は頼まれて名前を貸すだけですので幽霊部員と思ってください」

「大丈夫。作文部はきつと楽しい」

「ですから参加はしません。申請の数合わせです」

「桃ちゃんも夢中になること請け合い。作文部の活動は充実しきっている」

「いえ、私は参加しないので関係がな」

「いつしよに頑張っていこう」

「……」

稲葉の押しの強さは折り紙付きだ、と結城は密かに同情し、

「切磋琢磨して良い作品を作っていいこうぜ、桃ちゃん」
親指をたてると、もの凄い形相で睨まれた。

「やってけそうだね」

「どこをどう見てたらそう思えるんですか」

「まあまあ桃ちゃんも仲間になったことだし、ここは本格的に活動目的、目標を決めましょうよ」

場をしきりだしたヒマワリに、面倒くさいから全部まかせたと丸投げすることにした。

「目的は小説作りだよね」

「作文の間違いだ」

「目標は入選、賞金、印税、タックスヘイブン、リゾート、ハワイアーンだよね！」

「とんでもないところに行きついたなっ！」

「おおよ、ユーユーは違うのかい」

「てめえと同じ意見のヤツがいるか！」

桃が小さく手をあげた。

「お前は面倒くさいだけだろ！」

「初対面なのにずけずけおっしやいますね」

「な、あ、まあ、ううん……」

実際彼女の言うとおりなのだがいまいち腑に落ちず、言葉を濁した結城に、

「だからと言ってどうこう言うつもりはありませんが」と桃は冷ややかに彼を見た。

「まあまあ、それじゃユーユーはどんな活動目的があるのさ」

場を和ませる声音のヒマワリに結城は小さく息を吐いた。部を設立する気にはなれない彼にとって、二人は邪魔な人物に他ならない。正直言うなら稲葉冥利とも手を切りたいところなのだ。

「あわよくば入選、賞金、あわよくば印税だな」

「あわよくば、をつけただけで私とそんなに大差ないじゃん！」

「お前らには節操がないんだよ。俺は自分らの実力を鑑みた上で、おこがましい発言はしないの」

「小さい小さい。夢は大きくビッグマウスで」

こくこくと頷く日向の横で、桃が退屈そうに欠伸をしていた。殴りたくなった。

「ユーユーはだめだねえ。冥利は？」

「日本全国あまねく国民に私の存在を知らしめる」

「……NHKみたいだね」

ジャギ様の間違いだろ。

「とにもかくにも、小説作りでありまーす！」

「その通り」

「そして賞への応募！目指せ入選、印税！頑張りましょー」

「おおー」

高気圧と低気圧の激突はプラスの方向に科学変化したらしい。とんとん拍子に進む部活動に、呆れを伴った目眩を覚える。もうなにを言おうと無駄なのだ、彼女たちを止めることはできない。

「完成作品はどこに送るんです？」

「え」

物事の行く末を見守ることにした彼にとって、桃の発言は天使のラッパのように聞こえた。

「そりゃ、出版社だよ」

桃と目を合わせず視線を宙に漂わせてヒマワリは至極当然のことのように呟く。

「どこの出版社ですか？例えば」

「でっかいところ」

「なんという賞に応募する気なんですか？直木賞、芥川賞、ノーベル文学賞？」

語尾に思いきりバカにしたかつこ笑が付帯されている。

「ははっ、日向葵賞、なんてーだめかな？はは」

「尊敬すら覚えます。あんまり間抜けな発言しないでください、同

じ四組として恥ずかしい」

昨日似たようなことを言っていた稲葉が、密かに顔を赤くして俯いた。

それを横目で見て、結城は小さくガツポーズをとる。暴走列車たる日向を足止めし、湯だった頭に水をぶっかける桃の発言は、救世主の一言のように神々しく感じられた。

彼女ならふざけた部活をつぶしてくれるかもしれない。

「それで部活を発足しようなんてよく言えますね」

「桃ちゃん、急いては事を仕損じる、という言葉を知ってるかい？」

「先んずれば人を制すとも言います。作文部に必要なな情報、準備、行動です」

「うーん、そうねー」

「調べときました」

どん、と机の上にA4サイズのプリントの束が置かれた。

「純文学、大衆小説、ライトノベル。小説の賞のジャンルは多岐にわたります。数ある中から厳選し、さらに新人賞があるものを選びました。応募要項なども記載されてますから目を通してください」

「やる気満々かよ！」

涼しい顔で凄まじい活躍ぶりをみせる新入部員に、結城はたまらず声を荒げた。潰す側かと思ったら、その実部の一番の功労者だったのだ、裏切られた心情だ。

「すげえ、さすが桃ちゃん。私たちにできないことをー以下略！」

「ありがとう。どれにしよう」

日向と稲葉の二人はプリントの束に餌を求める鯉のように群がる。その様子を眺めながら桃は一枚を取り上げ、パンと音をたてて叩いた。

「締め切りが3ヶ月以内で最も入選しやすいと思われるのがコレです」

A4サイズの藁半紙に印刷された文章を日向がたどたく読みあげる。

「青春小説、大賞？」

小説のジャンルを細分化した時、物語の主人公、それを取り巻く登場人物が若年者でありモラトリアムを通じた体験が綴られているものを青春小説という。

「このジャンルなら若者の心情をよりリアルに決るように記せます。描写すべき人物は同年代ですしなにより物語が破綻しにくい」

「おおー。なんだか行けそうな気がしてきたよ」

日向のやる気に満ち溢れた発言に、

「私は最初から出来ると思っていた」

と稲葉がよくわからない対抗心を燃やしたところで、沈黙を決め込んでいた結城は、声をあげた。

「青春してない俺にはそんなもん書けん」

悲しい発言だった。

「美少女三人に囲まれて、青春してないなんてどの口が言うのさー」

「お前は青春してると言えるのか？青春ってなんだ？」

突然の夕陽に語りかけるような質問に、日向は口を半開きにして固まる。

「確かに充実した日々を送るのが青春だとしたら、私の日常は灰色にまみれた無味乾燥なものかもしれない」

結城の悲しい発言に、さらに落ち込むような声音で稲葉が静かに同調する。

「だけどこれから作りあげる作文部の日常はまさしく青春と称するに相違ないものになると思う」

「それは違いますよ。稲葉さん。ユーユーさん」

あだ名がすでに固定されてしまったこと結城は静かに理解した。

「青春とは、還暦である60までを方位を表す青龍白虎朱雀玄武の四神で割り、春夏秋冬の四季を加えたもの。若い時が青春、そこから朱夏、白秋を経て玄冬。若い時代を表す単語が「青春」なんです」
そこで「つまり」と一息ついてから、

「若ければ青春なんです」
身も蓋もねえ。

「さて、賞の募集要項は『青春小説』であること」
桃はプリントの束の一番上にくるよう手にもったそれをそつと置き、

「これで一つやってみませんか？」

くりくりした瞳を他のメンバーに向けた。

「手拱いていた小説のジャンルはこれで決ー定、私は異論なーし」
ヒマワリが大きく手をあげ、賛同する。

「俺も別に」

作文部の活動としては反対である結城だが、やってみたいという気持ちの方が単純に勝っていた。

「私も」

稲葉は短いが確かな言葉で、はっきりと告げる。

「それでやってみたい」

稲葉のノートにはでっかく『青春』と書かれ、下に可愛らしく『決定！』と綴られた。

はじめの自己紹介で名を貸すだけで活動はしないと明言していたはずの桃だが、いつしか率先して部をまとめあげる妙な展開になっていた。

稲葉冥利が構築している作文部の雰囲気は、やる気を引き出す力があるのかも、と結城はなんとなくそう思った。

「ジャンルが決まったところで次は話作り、です」

机に広げられたノートをとんとんとペンで叩きながら桃が呟いた。
「皆さんの遺憾なき意見を、」

「仄かな恋愛描写は入りたい」

「クスリと笑えるコメディ要素は欲しいよね」

「緊迫感を高めるホラーは不可欠だろ」

てんでばらばらな意見に、いつの間にか司会進行役になっていた

少女は閉口した。

「笑える部分がなくちゃ物語がダレるよ」

「ばっか、お前そんなんじゃ締まらねーだろ。読み手をドキドキさせなくちゃな」

「ユーユーもヒマワリも青春小説ということを忘れている。切なさ描写しなければ、青い春とはいえない」

「それもあるかもしれないけどさあ、やっぱり青春っていったら下らないことやって笑い転げる、コレでしょ」

「多感な時期のモヤモヤとした感情だな、丁寧に残酷に描写して、」
「ストツープっ！」

ガヤガヤと騒々しい相談風景にたまらず声をあげた桃は、机を大きく叩いてから立ち上がった。

他のメンバーは鳩に豆鉄砲といった様子でそれを見る。

「物語には起承転結という順序があります」

「へっバカにすんじゃねー桃ちゃん、そんならい知ってるぜい、小論文の書き方で習ったもんね」。序論本論結論……あれ？」

ヒマワリの茶々を無視して桃は話を続けた。

「起で、承で、転で、それぞれの挙げたテーマを意識して話作りをしてみてはいかがでしょう。あくまで青春小説という枠組みを外さずに4つのルールを守って」

「そんなうまくできるかよ」

「上手く行くよう調節するのが作者の実力なんじゃないですか。しつくり来るプロットをみんなで考えましょう」「そうだなー」

良いアイデアを出そうと三人が首をひねり始めたのを見て、桃は人心地がついたように腰を下ろした。

唸りながら考え続け、数分経ってから日向がいの一番に挙手する。

「はい、考えつきました！」

「どうぞ」

メモできるようペンを構えた桃に促され、日向は元気潑刺に声をあげる。

「お笑い芸人を目指していた主人公がヒロインと恋に落ちて、彼女のストーリーカーに殺されかけるけど、なんやかやで結ばれる！」

「……」

「どう？」

「ヒマワリは少し梓に捕らわれすぎな気がします」

「却下かー」

残念そうに机に沈んだ彼女に変わって、

「はい」

稲葉が手をあげた。

「友達とふざけあいっこしてたら、空から女の子が降ってきて、ゾンビとバトルしながら、世界崩壊を免れる」

「脈絡がなさすぎます」

「……そう」

稲葉はかすかに肩を落とした。

「ユーユーさんは？」

「ん」

「なにかありますか？」

桃に突然降られ、なにも考えつかなかったとは言えず、

「線路脇の森林に死体があると噂で聞いた少年……少女たちが、だな、陽炎にばやける線路沿いをふざけあいながら、歩くわけ、だ」

とりあえず、ぱっと思いつきで、嘯いてみる。

「……」

「敵役にジャックバウアーなんかを配置して」

スタンドバイミー丸パクリの原案に、一同は皆口を閉ざした。

「いや、冗談、」

「いいねえ！」

「は？」

ネタばらしを続けようと声をあげた彼より先に日向が賞賛の声をあげた。

「ユーユーいいよ、それ！なんていうか、ノストラダムスな感じが

して」

「ノスタルジック」

「そうそれ郷愁的というか」

「たしかに死体を探しに行くという暗い設定と裏腹な切なさを彷彿とさせる題材です」

手放しで誉める桃に結城は慌ててこの設定はパクリだと声をあげた。

夜明け前

非公式なクラブの為、見回りに来た教師に退室を命じられ、唇を尖らせながら一同は帰路につくことになった。

「明日申請しよう」

「そうだね。いちいち先生に邪魔されてちゃ話が前に進まないよ」
ぶう垂れる日向と稲が仲良く廊下を先行して歩き、その少し後ろに結城と桃が続く。後列に会話なく、黙々と足を前に出すだけだ。

柿色が落ちる階段前についた時、シャツを桃に軽く摘まれた。

「なに？」と顔を彼女に向けて聞いてみたが、質問を無視し彼女は階段をくだる前列の二人を「すみません」と呼びつけた。

「ん？」

「私とユー・ユーさんは委員会があるので先帰っててください」

「委員会？今から？」

「ええ、彼サボりがちなので」

桃は涼しい顔で帰路につこうとする結城の足を止める。

「なんでお前が俺の帰宅を邪魔すんだ」

「私も図書委員だからです」

クラスのもう一人の委員が積極的に参加してくれているおかげで今まで悠々とサボることが出来ていたのに。

「了解」

ヒラヒラと手を降る日向の横で、稲葉冥利は階段を見上げ、

「それじゃまた明日」

と小さく手を挙げた。

「行きましたか。ユー・ユーさん、ついて来てください」

「ほんとにお前図書委員？初対面じゃね」

二人ぶんの足音がなくなったのを確認し、彼女は乳飲み子のように掴んでいたシャツを放した。顔を覚えるのは得意ではないが、どんなに思い返してみても図書委員として桃と一緒に働いていた記憶

はない。

「さっきのは嘘です」

スタスタと来た道を戻り始めた彼女を追いかけて、柔らかな肩に手を置く。

「どういうことだ？」

「二人きりになるきっかけを作るため嘘をつきましたが、意味もなくサボるのは止めたほうがいいと思いますよ」

「お前……」

「なんです？」

本来ならばこちらが頭を下げなければ付き合えないような高嶺の花のような女の子だ。千載一遇のチャンスに等しい。

「考えてやらんこともないけど、あんまプライベート探るなよ」

「それに関しては謝罪します。こちらものつぴきならない状況なのです」

「愛が重たいな」

「……あなた、馬鹿ですか？」

「はい？」

桃は二年一組のくすんだドアを開け、先ほど自分が腰を下ろしていた椅子に座った。そこはモテない友達の席で、女子が借りて座っているって知ったら喜ぶだろうなあ、と思いながら結城も自分の席に腰をおろす。

室内は電灯をつけていないため薄暗く、閉めきったカーテンは穏やかな日光をぼんやりと透過させていた。

「桃ちゃん、一つ確認していい？」

「はい？」

「最近、……奇妙な夢を見るんだけど」

言ったらバカにされるだろうかと逡巡しながら言葉を続ける。

「なにか知ってる？」

どうして私があなたの夢を存じ上げないといけないんですか、そういう答えが返ってくるかと身構えた彼の覚悟は徒労に終わった。

「ヒマワリから聞いたんですよ？夢は稲葉冥利が作りだした仮想現実の世界です」

「あ、ああやっぱり俺はファンタジー世界に迷いこんでしまったんだな。わかってたさ」

自虐ぎみに鼻を鳴らす少年に、桃は薄く笑みを浮かべ、

「ええ、ですからいくつか注意点を教えたくて、こうして呼び止めた次第です。ヒマワリばかりに負担をかけるわけにはいきませんものね」

肩を落とす結城に桃は手に持ったカバンからメモ帳を取り出し、ページを一枚千切って渡した。

「いいですか、ユーユーさん、よく肝に銘じておいて下さい」
そこにはいくつかの注意が書かれていた。

- 1、夢の中に稲葉冥利はあらわれない。
- 2、夢は稲葉冥利が感銘を受けたものが色濃く反映される。
- 3、稲葉冥利に与えられたストーリーに逆らうと、夢が崩壊し、現実になんらかの影響が起こるかもしれない。
- 4、大抵は感覚として数分で終わる。
- 5、稲葉冥利は自分の夢が現実に影響を与えていることを知らない。

「わざわざ書いたのか？」

「ええ」

「ご苦労なこつたと目を通す。」

「やっぱり稲葉は自分の夢が不思議空間に繋がっていることを知らないんだな」

忠告を受けていたから、俺も教えることはしなかったが、

「認知されるとマズいことでもあるのか？」

結城の質問に桃は微かに言葉を震わせた。

「私たちが他者の夢に侵入できるようになったのは8年前だと説明しましたが、覚えていますか？」

「あー、夢の中で言ってたなあ。つまり稲葉冥利の夢は現実に影響を与え、お前らは安全弁として、その8年前だか会得した能力を活

用してるんだろ？」

「少し違います」

一区切りつけるように息を吸ってから桃は続けた。

「能力は会得したのではなく正確には被験体であつた彼女の暴走に巻き込まれた一般市民が私たちだったんです」

一般市民が、というなんでもないようなフレーズの重要性が高いことを吹き出した冷や汗が知らせていた。

「どういう、ことだ？」

「8年前、奈黒で起こつた昏睡事件をご存知でしょうか」
「……」

流れるニュースをぼんやりと眺めている6歳の自分、そのテレビの向こう側の世界が、自分のよく知る界限だったことに当時衝撃を受けた。

奈黒は、沿岸部に位置する小さな町だ。

「たしかガス漏れで集団災害が起きた」

「ええ、大規模一酸化炭素中毒事故、表向きはこうなっています」

「それが稲葉の仕業だったのか？冗談きついで」

都市ガスに含まれる炭素ガスが漏れ、住民一帯に被害を及ぼした、と新聞に書かれていたことを思い出した。

「催眠誘導能力に目をつけられていた稲葉冥利は、当時研究目的で奈黒の先の施設に運こばれていました。ところが車が横転事故を起こしたんです」

集団昏睡事件といつても、被害はせいぜい十数名、死者はいなかったはずだ。

「車から漏れでた冥利の念波は、子どもの脳に甚大な影響を与えました」

「さて被害の大多数が大人だっただろうか」

「ええ、完成された脳は揺さぶる程度でしたが、発展途上の脳は冥利の念波に書き加えられたのです。正確には次元を引き上げられたというべきでしょうか」

「頭空っぽの方が夢詰めこめるってわけか？」

「他者の感応性を高め精神が無防備な時に干渉できる、稲葉冥利に似た力を得た子どもたちは、検査と称して彼女と同じ施設に隔離され、そこで自分たちの役割を理解しました」

彼の冗談は彼女に通じなかった。

「稲葉冥利の精神は不安定でちよつとしたことで磨耗してしまいました。8年前の事件は彼女が自らの力を自覚したことによって起こったのです」

彼女はそう言うってから彼の手にあるメモの5番目を指さした。

稲葉冥利は自分の夢が現実に影響を与えていることを知らない。

「混乱状態に陥った彼女は自らの精神をリセットすることによって自我の崩壊を免れました」

「リセットって」

「わかりやすい言葉で言えば、全てを忘れた、記憶喪失、逆行性健忘症の状態です」

そう言うってから彼女は立ち上がった。

「わかりますかユーユーさん。冥利さんにとって夢は現実であり現実には夢なんです。その矛盾を起こさないため私たちは自らをセーフティーと称しました」

「恨んではないのか？よくわからん非日常に巻き込まれて」

「仲間うちにそういう人もいますが、過半数が彼女を哀れに思っただけには研究所から稲葉冥利を連れ出すことに成功しました。全員が汚れを知らない純粹無垢な子どもとはいえ冥利さんのお陰で天才的な頭脳を獲得した物もありますから」

ヒマワリの「彼女は今は自由の身だからね」という言葉が耳に蘇る。

稲葉冥利は本当に研究目的で隔離されていたのか。

「土台があるからでしょう、最近精神がようやく年齢に追いついてきました。ユーユーさんが余計なことをしなければ、彼女はそのまま成長できるのです」

偉そうな物言いに結城はムツとなった。

「そりゃいったいどういう意味だよ」

「我々の責務をご存知いただけたのなら、今までのあなたがどれだけイレギュラーだったかわかりいただいたはずですよ」

「稲葉の夢に巻き込まれたという点ではなんら変わらんだろ」

「いいですか、ユーユーさん。私たちは彼女の夢、ひいては精神、またはそれに繋がる現実を守るため、極力刺激しないようにしているですよ。それをあなたは」

彼女の語気が強くなる。

「なにがスプラッタホラーですか！曲がり間違つて稲葉冥利が感銘を受け夢の内容がソレになったらどうしてくれるんです」

「演じりゃいいだろ。ゾンビを。ストーリーに則つて」

「突拍子の無い物語はそれだけ破綻が生まれやすくなります。なるたけあたりさわりの無い、出来るだけ現実に近い内容を稲葉さんに提案してる私たちの苦勞を考えてください」

そういえばヒマワリは「日常ギャグ」「コメディ」。桃は「青春小説」と確かに現実的なジャンルを選択していた。

「はいはいわかりました今度からそうしますー」

「ほんとくれぐれもお願ひしますよ」

線路は灼熱に揺れ、空はいまに落ちてきそうなくらい高く遠く広がっている。風に吹かれた蝉の声はどこまでも響き渡り、滴り落ちる汗が真夏を象徴していた。

「またかいな」

目の前に広がるありえない光景に、結城はがっくりと膝から崩れ落ちた。

「あいつ、気に入ってやがったな」

敷き詰められた砂利が音をたて、彼の苦悩を演出していた。

「あれま、ユーユーの言つてたシチュエーションのようだね」

「たしかスタンドバイミーですか」

いつの間にかあらわれたヒマワリと桃の二人は降りかかる夏の太陽光に目を細め、炎天下で歪む線路の先を見据えようとした。

「これってストーリーがあんのかな」

「さあ。また場所だけじゃないですか。とりあえず歩きますか。そういう話なんですよ」

「そうだね。さっ、ユーユーほら立って」

半ば予想はしていたが睡眠をとらぬわけにもいかず、ベッドで朦朧としていたら、いつの間にかまた稲葉の夢に引っ張られたらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9220v/>

じゅぶないる作文クラブ

2011年10月7日03時24分発行